



共に育てよう、京都大学学術情報リポジトリ

国際交流・情報基盤担当理事兼副学長 西村 周三

すでにご存じの方もおられると思いますが、去る6月8日(木)に、京都大学学術情報リポジトリおよび準備サイトを試験公開しました。「(機関)リポジトリ」という言葉にはあまり馴染みがないかもしれませんが、大学等の教育研究機関で生産されたさまざまな知的生産物を電子的に収集、蓄積、保存し、学内外へ公開するためのインターネット上の電子書庫であり、発信拠点でもあります。近年、海外の大学図書館を中心に設置が相次いでいます。日本ではごく少数の大学が先駆的に取りかかっていたに過ぎませんでしたが、平成17年度から国立情報学研究所(NII)の最先端学術情報基盤(Cyber Science Infrastructure=CSI)の構築推進委託事業(以下、CSI事業という。)により、19大学がリポジトリの構築に着手しました。本学もこのCSI事業に採択され、昨年度から構築を開始し、このたびようやく試験公開の運びとなりました。

CSI事業を開始するにあたっては、総長はじめ、役員会、部局長会議のご承認をいただき、全学的な事業として全学のご理解とご協力を得ながら進めています。検討・構築体制としては、私が主査を務めます「学術情報リポジトリ検討委員会」を設置し、各学部、研究所、センター、

事務部等から15名の委員に出ている。方針や方向性を検討しています。また、個別具体的な課題についてはさらに多くの委員に加わっていただき、システム構築、制度整備、コンテンツ形成という3つの作業部会を設けて検討を行っています。



上述しましたように、リポジトリは海外で盛んになりつつあります。リポジトリの設置状況がわかるRegistry of Open Access Repositories (ROAR)¹⁾を参照すると728のリポジトリが立ち上がっています。国別に見ると、米国196、英国74、ドイツ65、ブラジル45、カナダ32などとなっています。日本は現在のところ16しか登録されていませんが、平成18年度には、17年度採択大学を含めた57大学が新たにCSI事業によりリポジトリ構築を行うこととなります。順調にいけば、数ではドイツに次いで4番目になりそうです。

また、国内の情勢に目を向けると、各種の答申においてもリポジトリの役割が強調されており、例えば、『学術情報基盤の今後の在り方について(報告)』(平成18年3月23日、科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会^予)の中では、「『機関リポジトリ』への取組みが、教育研究活動を一層推進し、大学からの情報発信を強化するための方法として、世界的規模で進みつつある」、「大学からの情報発信力の強化や、大学の社会に対する説明責任の履行の観点から、またオープンアクセスへの対応という観点からも、有用な手法であると考えられる」と記述されています。日本においても、リポジトリの構築、整備が今後ますます盛んになる兆しが感じられます。

本学におけるリポジトリ構築はまだ緒に就いたばかりで、一朝一夕には解決の難しい課題もたくさんあります。しかし何よりも、コンテンツが入っていないければ、リポジトリはただの空っぽの箱にしか過ぎません。学内の研究者の方々にはぜひ、多くの教育研究成果を登録していただき、京都大学学術情報リポジトリを共に育てていってくださるようお願いいたします。

<注>

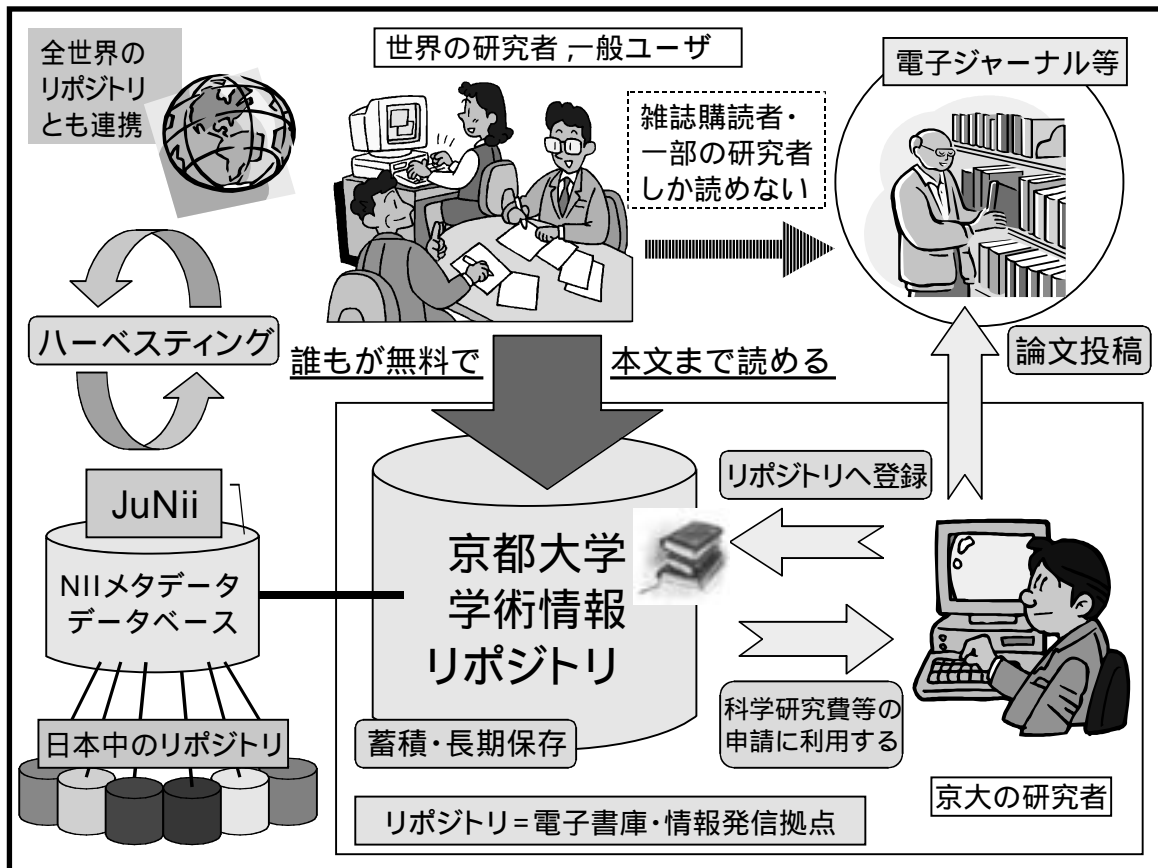
1) <<http://archives.eprints.org/>>

数字は8月7日現在

2) <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/06041015/020.pdf>

(にしむら しゅうぞう)

京都大学学術情報リポジトリ (<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/>)



機関リポジトリ入門

Q.1 そもそも機関リポジトリとは何ですか？

A.1 機関リポジトリ（または学術機関リポジトリ。Institutional Repositoryの日本語訳。レポジトリと表記されることもあります）とは、大学等の教育研究機関内で生産されたさまざまな知的生産物を電子的に収集、蓄積、保存し、機関内外に原則として無償で公開、発信するためにインターネット上に設置された電子書庫、情報発信拠点のことです。すなわち、京都大学の責任において設置される、京都大学の教育研究成果コレクションと呼ぶことができるでしょう。特にここ1～2年ほどの間に、世界的規模で構築が急速に進められています¹⁾。学問分野によっては早くから、プレプリント・サーバとかe-Printアーカイブといったサーバが発達していますが、機関別か分野別かの違いを除いてはだいたい似たようなものと考えていいでしょう。

Q.2 知的生産物とはどのようなものを指しますか？

A.2 図書、プレプリント、学術雑誌掲載論文、紀要論文、学位論文、科学研究費報告書、学会発表資料、COE研究成果、実験データ、シンポジウム記録などの研究成果や、講義資料・教材といった教育資料、そのほか機関で収集されてきた貴重な資・史料なども対象として考えられるでしょう。学位論文、科学研究費報告書、学会発表資料などは重要な研究成果の割には目に触れる機会が少なく、利用しにくい資料ですので、リポジトリで電子的に利用できるようにすることは効果的でしょう。ファイル形式としては、テキスト文書、word文書、html、pdf、パワーポイントなどたいいていのものは登録可能ですが、可能ならばpdfに変換することを推奨します。

Q.3 今なぜ機関リポジトリの設置が進んでいるのですか？

A.3 下記のような背景があります。

(1) シリアルズ・クライシス (Serials Crisis)

学術雑誌の価格は毎年値上がりが続いています。そのために大学図書館や研究者は購読を中止せざるを得なくなり、購読者数の減少がさらなる価格の高騰を招くという悪循環に陥り、日本の大学全体で雑誌への支出額が増えているにもかかわらず、購読しているタイトル数が激減するという現象を引き起こしています（1980年代の終わりに40,000タイトルほどあったのが、2000年代になって20,000タイトル程度にまで減ってしまいました）。京都大学ではまだしも、中小規模の大学では研究に必要な文献の入手が非常に困難になっています。学術雑誌による情報流通が滞っているこの状況は研究者の立場から見れば、自分の研究成果に目を通してくれる読者が減少し、失われているということの意味しています。従来、商業主義主導の学術雑誌を中心に成り立ってきた学術コミュニケーションが崩壊する危険性をはらんでいます。

(2) オープンアクセス運動

上述したように、商業主義主導の学術雑誌を中心とした学術コミュニケーションは行き詰まりを見せています。この閉塞状況を打開する手だてとして盛んになりつつあるのが、学術情報へ誰もが無料で障壁なくアクセスできるようにしようというオープンアクセスの動きです。これには2つの方法が実践されています。機関リポジトリは、下記の受け皿として機能すると考えられます²⁾。

オープンアクセス誌の発行

一つの方法が、掲載論文を無償で利用者に公開する電子ジャーナル=オープンアクセ

ス誌を発行しようという動きです。オープンアクセス誌の普及状況は、スウェーデンのLund 大学が運営しているDOAJ (Directory of Open Access Journal) で概観することができ、2006年7月現在、2,300を超えるオープンアクセス誌が登録されています³⁾。

セルフアーカイブ

もう一つの方法は、著者が自分の研究成果を機関リポジトリや自分自身のホームページから無料で公開するセルフアーカイブです。ただ、学術雑誌に投稿した論文の著作権は出版社に帰属するのが一般的で、著者といえども自分の論文を自由にインターネットで発信することはできません。しかし最近では、そのことを著者に許諾する出版社が増えてきています。このような出版社をGreen Publisher、雑誌をGreen Journalと呼んでいます。

Q.4 Green Journalについてもう少し詳しく教えてください。

A.4 RoMEOプロジェクトの調査によれば、海外の学術雑誌の94%がプレプリント、もしくはポストプリント、もしくはプレプリントとポストプリントの両方をセルフアーカイブすることを許諾しています⁴⁾。ただし、出版社がレイアウトした出版社版を登録することは基本的にできないので、査読が通って受理されることになった著者の手元にある最終確定稿(著者最終版)を登録することになります。

Q.5 機関リポジトリのメリットは何ですか？

A.5 登録することによってGoogle Scholar等の検索エンジンを通して世界中から検索可能となり、より多くの研究者の目に触れ、教育研究成果のvisibility(可視性)を格段に高めます⁵⁾。また、散逸しがちな電子的な知的生産物を貴重なコレクションとして大切に蓄積し、責任を持って後世へ継承していきます。さらに大学としても、教育研究成果を還元することによって、社会に対する説明責任を果

たすと共に、先進的研究成果を迅速に公開することで、大学の知名度・ブランドイメージを高め、知の創造と発信という大学の使命を側面から支えることとなります。

Q.6 個人や研究室のホームページで公開すると、機関リポジトリに登録するのとではどう違うのですか？

A.6 どちらの場合もインターネットの検索エンジンで検索できるという点においては変わりませんが、リポジトリに登録するにはメタデータ(そのコンテンツに関するデータ。タイトル、作成者、キーワード、抄録など)と一緒に登録します。このメタデータをOAI-PMH (Open Archives Initiative Protocol for Metadata Harvesting⁶⁾)という国際標準のプロトコルを使用して提供し、国立情報学研究所のJuNii⁷⁾、ミシガン大学のOAIster⁸⁾などの全国規模、世界規模のリポジトリにハーベストしてもらうことによってより広範に流布させ、検索される機会を増やすことができます。

Q.7 誰でも登録できるのですか？

A.7 京大の構成員、もしくは構成員であった人なら可能ですが、登録しようとするコンテンツの作成に関与した人でなければなりません。また、複数の著作権者がいる場合には、自分以外の著作権者から許諾をとっていただく必要があります。

Q.8 どのように登録するのですか？

A.8 将来的には、登録しようとする人にセルフアーカイブしていただくのが理想ですが、当面は附属図書館で代行登録することを考えています。登録しようとするコンテンツ(電子的形態)とそのコンテンツに関する情報(タイトル、著者、掲載誌、キーワード、抄録等)を電子メールで附属図書館電子情報掛宛てにお送りください。

Q.9 機関リポジトリに登録すると著作権はどうなるのですか？

A.9 著作権が附属図書館に移転するということはありません。ただし、コンテンツを複製してリポジトリのサーバに格納すること、ネットワークを通じて不特定多数に無料で公開すること、保存や利用の便宜のため複製・媒体変換することを附属図書館に無償で許諾してください。

登録希望、ご不明な点、ご質問等ありましたら、附属図書館電子情報掛まで気軽にお問い合わせください。(内線2618、dlkyoto@kulib.kyoto-u.ac.jp)

<注>

- 1) Registry of Open Access Repositories
<<http://archives.eprints.org/>>
- 2) BOAI (Budapest Open Access Initiative) は、オープンアクセス実現のためにこの2つの戦略があることを明確に提示して、その後の議論に多大な影響を与えました。
<http://www.soros.org/openaccess/read.shtml>
- 3) DOAJ <<http://www.doaj.org/>>
- 4) Journal Policies - Self-Archiving Policy by Journal
<<http://romeo.eprints.org/>>
SHERPA/RoMEO: Publisher copyright policies & self-archiving
<<http://www.sherpa.ac.uk/romeo.php?all=yes>>
日本の学協会の間ではまだあまり知られてな

く、関心も低いようです。

「著作権の取扱いに関するアンケート」

<<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/ir/>>

- 5) 物理学分野で、オープンアクセスにした論文がオープンアクセスにしなかった論文の約5.6倍多く引用されたという統計結果が報告されています。

Stevan Harnad, Tim Brody, "Comparing the Impact of Open Access (OA) vs. Non-OA Articles in the Same Journals"; *D-Lib Magazine*, v.10, n.6 (June 2004)

<<http://www.dlib.org/dlib/june04/harnad/06harnad.html>>

- 6) The Open Archives Initiative Protocol for Metadata Harvesting
<<http://www.openarchives.org/OAI/openarchivesprotocol.html>>
- 7) 大学Webサイト資源検索 (JuNii)
<<http://ju.nii.ac.jp/>>
- 8) OAIster
<<http://oaister.umdl.umich.edu/o/oaister/>>

<参考文献>

尾城孝一「機関リポジトリ」

(逸村裕, 竹内比呂也編『変わりゆく大学図書館』, 勁草書房, p.101-114, 2005)

栗山正光「総論 学術情報リポジトリ」

(『情報の科学と技術』Vol.55, No.10, p.413-420, 2005)

(附属図書館情報管理課)

<一冊の本シリーズ 3 >

思い出の一冊 松平千秋訳『ヘロドトス』

文学研究科教授 杉山 正明

それは、ほとんど偶然だった。昭和42年(1967年)高校に入学したわたくしは、その夏休み明け直後だったとおもう、田舎町には大型の書店の奥に文学ものや歴史ものを並べていたコーナーがあり、なにを買いたいとか、なにが読みたいというわけでもなく、ただなんとなく眺めていた。そこにたまたま、筑摩書房の世界古典文学全集の新刊として『ヘロドトス』があった。松平千秋という人の訳である。それがなんとなく気になった。値段は1,000円。ちょうどポケットに買えるだけだった。

松平千秋訳『ヘロドトス』は、自分の意志で購入した事実上でほとんど最初の書物だった。自分で金を出してあがったというのは、強烈なインパクトになった。その日から読みはじめ、やたらにおもしろく熱中した。上下二段組みは、読みごたえ十分の量もあり、ついに三日を費やして読み終えた。その間、高校へはいかなかった。それどころか、読了した途端に発熱し、結局通算して一週間ほど休んでしまった。母がひどく心配したのをおぼえている。

その年のうちに、平凡社東洋文庫シリーズの第一巻目『楼蘭』やなにやかや、自力で本買いをした。たぶん、ひとつには高校生になって、本を買える程度の小遣いをもらえるようになったからなのだろう。それ以上の高額書は母に頼んだ。わたくしにとって自分でそれなりに意識した読書、いいかえれば人間として「物心」がついたうえでの読書は、この『ヘロドトス』から始まった。松平千秋という人は、憧れの人となった。その後、近年にいたるま

で岩波文庫などで松平千秋訳の『イリアス』や『オデュッセイア』といった書物が出版されると、すぐに目を通した。ちなみに『ヘロドトス』も、岩波文庫に入って、『歴史』上中下となっている。

昭和45年、京大の文学部に入学して、松平千秋なる人がその教員だと知って驚いた。『ヘロドトス』を原語で読みたいとおもい、ギリシア語も少しはかじった。だが、興味はどんどん移り変わり、現在の道を結局は選んだ。それから時すぎて、先年、日本経済新聞社から『遊牧民から見た世界史』(1997年)なる一書を出版した。そのなかで、松平千秋訳『ヘロドトス』を引用した。高校生のときに読んだ記憶のまま、とくに印象にのこった数ヶ所をとりあげた。

ところが、しばらくして、松平千秋先生からお誘いを頂戴したのは驚いた。葵祭のその日、高弟の中務哲郎さんのお伴をして比叡山の山腹にあるご自宅に参上した。ついに目にかかった憧れの先生は、想像したとおりの方であった。先生と奥様のおふたりが手づからすすめてくださった日本酒は、無上の味わいがあった。

さて、実は、以上と似た文章をまえにも書いたことがある。やや恥しい所業をあえてしたのは、ひとつには「この一冊」というならば、わたくしにとってやはり松平訳『ヘロドトス』のほかはないからである。かえりみて、現在までに目を通してきた書物は、それなりに広領域にわたる。また、歴史書ならば、人類史上最初の世界史といっていらいラシードウッドマン『集史』について、いままさに、わたくしは根本的な校訂・訳注書を作成中ではある。だが、そうした場合はちがって、若い時期の気ままな読書は、格別のものがある。

そして、もうひとつ。松平千秋先生は、さる六月二十一日、ご他界された。享年九十。松平先生が、さまざまなご著作・訳業を通して、日本列島に暮らす人びとにあたえつづけてこられたものは、はかりしれない。人間、人生、あるいは世界というものに思いをいたすとき、かけがえのない「心の窓」をわたくしたちに開いてくださった。忘れようもない

贈物である。まことに見事な学者人生というほかはない。

日本文化と世界文化のダブル・スタンダードを身におきつつ、人類文化の普遍性と多様性を居ながらに味わいゆく扉として、松平訳による一連の古典作品をおすすめしたい。松平先生への追悼と心よりの敬意をこめて。

(すぎやま まさあき)

近代の記録

「京セラ文庫『英国議会資料』」の開設にむけて

京都大学地域研究統合情報センター教授 押川 文子

この3月末、附属図書館脇の駐車場に連日トラックが横付けされ、夥しい量のダンボール箱が図書館に搬入された。箱の中身は19世紀初頭から20世紀後半にいたるイギリス議会資料(British Parliamentary Papers)。慎重に荷解きされた1万2千冊余の資料は、附属図書館B2層に新設された恒温設備をもつ「京セラ文庫室」およびB下層の書架に収納され、この秋には京都大学「京セラ文庫『英国議会資料』」として公開される予定である。

イギリス議会資料は、イギリス議会上下院に提出された法案、諸委員会報告書、各省庁や領事などさまざまな政府機関からの報告書、センサスや通商統計など多種多様な資料を集成したもので、議会の会期ごとにまとめられている。今回、京都大学に移管されたイギリス議会資料は、イギリス商務省が保管してきたほぼ完全な資料集成であり、下院文書は1801年から1986年、上院文書は1801年から1920年までをカバーしている。1998年に京セラ株式会社から国立民族学博物館地域研究企画交流センター(当時)に寄贈され、本年春の同センターの組織再編にともない、人間文化研究機構から京都大学に移管された。もともと商務省版は

欠本率が低いことに加えて損傷もすくなく、国立民族学博物館時代に公開に要する補修もほぼ完了しており、開設すれば、すべての冊を手にとって資料として閲覧することが可能となる。

イギリス議会資料が、近代を考える一級の資料であることは、おそらく説明を要しないであろう。議会資料として本格的に整理保管されるようになったのは19世紀の初頭、それ以来、まさに世界が大きく変貌した約200年の間、毎年途絶えることなく、同時代のイギリスが議会で検討すべきと考えたすべての事柄がこの資料には蓄積されてきた。どの年でもよいのだが、たとえば1861年の下院文書を見てみよう。19世紀の半ばから後半は、イギリス議会資料がもっとも充実した時期であり、1861年のセッションはおおよそ500ページほどの本69冊からなっている。法案には多種多様なものが含まれるが、なかには「死亡した妻の妹との結婚を許可する法律」といった法案もある。同じ年の委員会報告書のなかには、その2年前にインド・ベンガル地方を揺るがし、植民地土地行政のみならず「ネイティブス」の言論形成の契機ともなった、藍の強制栽培に対する農民の抵抗運動に関する特別委員会の報告書「藍騒擾に関する報告書」

が含まれている。この報告書には、インドにおける藍栽培の現状と農民の不満の要因が叙述されているだけでなく、同委員会がベンガル各地を巡回して行った農民や地主、藍加工業者などへの詳細なヒアリング記録が添付されている。私事になるが、私が初めてこの報告書を見たのは1970年代のなかばにインドに留学していたときのことだった。暑い大学図書館の隅で、一人ひとり名前をもつ農民たちが具体的に彼らの農家経営にとって藍栽培がいかに不利益なものを陳述するのを読みながら、百余年のときを経てインドのひとつの時代が鮮明に姿を見せたような不思議な感覚にとらわれた記憶がある。そして今、この報告書が英国議会資料の一冊として並んでいるのをみると、彼らの陳述を、記録し、翻訳編集し、印刷し、議会に報告した当時のイギリスという存在、そして19世紀半ばの世界のありようにもあらためて気づかされる。この1861年の下院文書にはこのほかにも、「日本の状況」に関する江戸の公使から本国あての書簡など、イギリスの植民地支配や対外関係だけみても、実に多様な文書が含まれているのである。

資料としての議会資料の特色は、こうした同時代性、網羅性だけでなく、ひとつひとつの文書が、議会への報告を前提とした「編纂」された資料という点にもある。先に触れた「藍騒擾報告書」のような調査をまとめた報告書はもちろん、日本に関する公使書簡の背後には各地の領事からの報告がある。いわば資料の上澄み、エッセンスなのである。この特色がもっとも明確にできるのは、センサスや通商統計など、定期的に一定の形式で提出される統計類だろう。この編纂と定型化によってイギリス議会資料は、錯綜した事象の全体を、近代という長いタイムスパンで俯瞰することを可能にした。同時にこの上澄みという性格は、別の見方をすれば「何が議会に報告されなかったか」というもうひと



「京セラ文庫『英国議会資料』」

つの隠れた問いを投げかけている。議会資料は関連する資料と組み合わせることによって、今なお多くの発見がありうる資料なのである。

イギリス議会資料については、すでにアイルランド大学出版会が刊行した19世紀資料の抜粋リプリント版や各種のマイクロ・フィッシュ、タイトルなどから検索ができる検索ツール、さらに2005年からはウェブ上で全文検索と閲覧が可能なウェブ版も発売されている。とくにこのウェブ版は、膨大で網羅的な資料を自由に検索閲覧することが可能なシステムで、ここ数年で議会資料の利用はおそらくまったく新しい段階に移行し、従来では考えられなかったアプローチや分析精度の向上が見られるであろう。

しかし、こうした新しいツールだけでは、ともすると無限の可能性をもつ資料を読む側の視野で狭く切り取ることにもなりかねない。「京セラ文庫『英国議会資料』」は、附属図書館のご理解のもとに、地下書庫に配置して公開を予定している。気儘に1冊を手にとって、死んだ妻の妹と結婚する法律、ベンガル農民の苦境、「loonin (浪人)」の襲撃の噂に対応に追われる江戸の公使、こうしたことが同時に起きた近代の200年を、行きつ戻りつ逍遙してはどうだろうか。

(おしかわ ふみこ)

学内デリバリー・サービス(現物貸借)の運用開始について

京都大学図書館機構では、平成18年3月27日より標記サービス(正式名称:京都大学図書館(室)間デリバリー・サービス(現物貸借))の試行運用を、5月15日より本運用を開始しました。このサービスは、学内図書館(室)間の相互貸借を通じ利用者へ便宜を図るための新たなサービスとして提供するもので、これにより利用者は、借用することが難しかった学内遠隔地図書館(室)の資料を、所属部局図書館(室)等、最寄りの図書館(室)窓口で借用することができるようになりました。このサービスは、「京都大学図書館(室)におけるデリバリー・サービス(現物貸借)運用申合せ」(以下運用申合せ)および「京都大学図書館(室)間デリバリー・サービス(現物貸借)マニュアル」(以下運用マニュアル)に基づき行われます。図書館(室)間の相互貸借をもとに行うサービスであること、配送は学内便で行うこと、貸出冊数および期間は原則として配送期間も含め3冊以内2週間とすること、が主な運用条件となっています。サービスへの参加・不参加は各図書館(室)の判断に委ねられ

ており、8月1日現在の参加館(室)は37館(室)となっています。

学内デリバリー・サービス(現物貸借)は、それまで学内の一部の図書館(室)間で個別合意のもとに行われていた図書資料の配送による貸借を全学的なサービスとして位置づけ定着させることを目指して、平成16年度に図書館職員で組織する業務改善検討委員会・図書館サービス部会により検討が始まり、平成17年度には同部会で「運用申合せ(案)」と「運用マニュアル(案)」の作成・整備が進められました。その後、業務改善検討委員会および図書館協議会第二特別委員会での案の審議を経て、平成18年4月の図書館協議会において両案が承認されたことを受け5月15日より本運用が開始、現在に至っています。

このサービスがまずは学内図書館(室)間に定着し、学内利用者にとってより便利で求められるサービスとして機能していくよう、各方面で見守り工夫を加えつつ発展させていく必要があるでしょう。

(附属図書館情報サービス課)

学内図書館室移転・閉室情報

1. 農学研究科・フィールド科学教育研究センター森林系

農学部総合館の耐震補強等の改修工事が2005年度から4カ年計画により、実施されています。改修工事および準備作業のため、農学研究科の図書室(農学部図書室・生物資源経済司書室・フィールド科学教育研究センター森林系図書室)の利用が制限されますので、簡単にご案内します。

農学部図書室の移転期間は、改修工事6ヶ月間(平成19年7月から平成19年12月)と、引っ越しにかかる期間(改修前2ヶ月、改修後1ヶ月)を含めて約9ヶ月間を予定しています。閉室期間は平成19年5月1日から7月31日までの2ヶ月間と、平成20年1月1日から同月31日の1ヶ月間、合わせて3ヶ月間を予定しています。この期間中は農学部図書室をご利用いただけません。

改修工事中の仮移転先はフィールド科学教育研究センター旧事務室及び研究室の予定です。仮移転先に現在の閲覧室を移設し、利用できる資料は、閲覧室配置図書、新着雑誌・新聞等となります。書庫配置資料(和・洋雑誌バックナンバー等)は全て箱詰めし別置保管予定ですので、ご利用いただくことができません。工事が完了し、準備が整い次第開室いたします。また農学部図書室ホームページでも、その都度お知らせいたします。

生物資源経済学専攻(旧・農林経済学教室)司書室は、平成18年度から3年間の予定で工学部7号館にて暫定的に開室しています。図書・雑誌・各種統計資料等合わせて約12万冊を所蔵しておりますが、仮移転期間が長期にわたるため、箱詰めのままで利用出来ない図書は現在のところありません。た

だし、資料は、本部構内2ヶ所・北部構内3ヶ所・学外1ヶ所に所在が分かれておりますので、ご利用の際には利用の可・不可を事前に司書室にご確認ください。

フィールド科学教育研究センター森林系図書室の改修工事期間は平成20年2月から7月で、それに伴う引っ越し等の予定は改修前1ヶ月の平成20年1月と改修後1ヶ月の8月を予定しており、引っ越し等期間中は閉室とさせていただきます。また改修工事期間中は開室の予定ですが、その間図書室が使用できるスペースは現在確定しておりませんので、開室場所もご利用いただける資料についての制限も流動的です。

改修期間中は皆様にご迷惑をおかけしますが、どうかよろしく申し上げます。

2. 理学研究科・理学部 数学教室図書室

理学部3号館が耐震補強工事を行うにあたり、2006年3月13日から2007年3月31日(予定)までの一年間図書室の利用が完全にできなくなります。工事の決定が急であったことと、予算の都合上の理由から、理学部内に図書を配架し閲覧できる場所を確保することができませんでした。そのため教室内教授会・図書委員会で検討した結果、誠に遺憾ながら「図書は全て箱詰めとし空きセミナー室等に保管する」「工事終了まで図書室は閉室する」「当教室内の教官・学生は閉室中数理解析研究所の図書室等を利用する」と決定致しました。利用者の皆様には大変ご不便をおかけいたしますが、ご理解頂きますよう宜しくお願い致します。

教員著作寄贈図書一覧

(平成18年4月～平成18年8月)

身 分	寄贈者氏名	寄 贈 図 書 名	出 版 社	出 版 年
名 誉 教 授	人見 勝人	入門編生産システム工学 第3版	共立出版	2006
教育学研究科	川崎 良孝	教師教育における「情報文化力」の育成	京都大学大学院 教育学研究科	2006
教育学研究科	川崎 良孝	アメリカ公立図書館・人種隔離・アメリカ図書館協会 理念と現実との確執	京都大学図書館 情報学研究会	2006
経済学研究科	堀 和生	京都大学東アジア関連文献目録 上巻 経済学部所蔵 下巻 農学部・人文科学研究所所蔵	京都大学経済学研究科上海センター	2006
経済学研究科	八木 紀一郎	社会経済学 資本主義を知る	名古屋大学出版会	2006
人間・環境学研究科	稲垣 直樹	星の王子さま	平凡社	2006
人間・環境学研究科	稲垣 直樹	Fortunes de Victor Hugo	Maisonneuve & Larose	2005
アジア・アフリカ地域研究研究科	杉島 敬志	現代インドネシアの地方社会： ミクロロジーのアプローチ	NTT出版	2006
人文科学研究所	岡村 秀典	雲岡石窟 遺物篇 (京都大学人文科学研究所研究報告)	朋友書店	2006
人文科学研究所	曾布川 寛	中国美術の図像と様式	中央公論美術出版	2006
人文科学研究所	籠谷 直人	支配と暴力 (岩波講座アジア・太平洋戦争7)	岩波書店	2006
霊長類研究所	松沢 哲郎	Cognitive development in chimpanzees	Springer	2006
高等教育研究開発推進センター	溝上 慎一	大学生の学び・入門	有斐閣	2006

この一覧は寄贈者著作のみの掲載となっております。上記以外にも多くの図書館資料を附属図書館や部局図書室にご寄贈頂きました。今後とも教育・研究用の蔵書充実のためご寄贈いただきたくよろしくお願いたします。

蔵書統計

(平成18年4月1日現在)

部 局	新規受入冊数			蔵書冊数			入力冊数		
	和書	洋書	計	和書	洋書	計	和書	洋書	計
附属図書館	9,751	2,111	11,862	595,322	275,288	870,610	334,377	94,239	428,616
附属図書館宇治分館	455	1,119	1,574	10,677	57,279	67,956	9,013	22,039	31,052
文学研究科・文学部	11,381	6,323	17,704	556,649	375,693	932,342	260,027	215,213	475,240
教育学研究科・教育学部	1,574	1,466	3,040	83,509	64,300	147,809	51,746	29,487	81,233
法学研究科・法学部	4,323	4,549	8,872	276,953	365,179	642,132	99,075	89,864	188,939
経済学研究科・経済学部	7,610	2,719	10,329	248,496	234,411	482,907	144,501	97,979	242,480
理学研究科・理学部	913	1,908	2,821	44,227	188,779	233,006	27,399	88,287	115,686
医学研究科・医学部	1,984	2,345	4,329	50,918	142,275	193,193	29,998	16,634	46,632
薬学研究科・薬学部	159	52	211	11,012	33,818	44,830	4,341	5,701	10,042
工学研究科・工学部	2,840	2,442	5,282	120,907	188,457	309,364	80,962	54,703	135,665
農学研究科・農学部	1,608	1,325	2,933	143,848	124,359	268,207	48,853	18,002	66,855
人間・環境学研究科・総合人間学部	10,731	2,110	12,841	355,619	293,404	649,023	159,608	105,138	264,746
エネルギー科学研究科	339	263	602	4,269	5,128	9,397	3,751	2,561	6,312
アジア・アフリカ地域研究研究科	498	996	1,494	11,671	72,735	84,406	9,841	79,898	89,739
情報学研究科	1,135	935	2,070	14,149	54,750	68,899	11,520	29,173	40,693
生命科学研究所	24	9	33	56	58	114	-	-	-
地球環境学学舎	150	134	284	329	287	616	281	131	412
医療技術短期大学部	-	-	-	17,815	3,642	21,457	6,643	730	7,373
医学部保健学科	417	59	476	776	124	900	-	-	-
人文科学研究科	5,578	1,215	6,793	463,708	79,271	542,979	115,650	24,414	140,064
再生医科学研究科	2	16	18	844	4,555	5,399	85	119	204
ウイルス研究所	-	53	53	328	7,067	7,395	88	1,152	1,240
経済研究所	91	449	540	40,210	36,053	76,263	27,538	26,859	54,397
基礎物理学研究所	201	1,411	1,612	8,157	72,377	80,534	6,178	37,699	43,877
数理解析研究所	24	585	609	6,541	73,051	79,592	6,320	48,060	54,380
原子炉実験所	595	1,084	1,679	12,981	34,007	46,988	12,161	9,589	21,750
霊長類研究所	193	625	818	7,127	15,907	23,034	5,014	4,953	9,967
東南アジア研究所	650	44,615	45,265	25,405	169,995	195,400	18,009	73,838	91,847
放射性同位元素総合センター	25	21	46	64	50	114	64	20	84
環境保全センター	-	31	31	618	1,274	1,892	250	1,254	1,504
国際交流センター	-	-	-	5	-	5	-	-	-
高等教育研究開発推進センター	49	42	91	2,453	996	3,449	30	13	43
国際融合創造センター	60	-	60	82	7	89	8	-	8
フィールド科学教育研究センター	57	49	106	12,597	7,989	20,586	5,348	2,345	7,693
放射線生物研究センター	27	80	107	433	1,905	2,338	218	128	346
生態学研究センター	1,272	592	1,864	8,399	5,544	13,943	8,673	5,866	14,539
学術情報メディアセンター	68	22	90	5,836	12,646	18,482	5,135	7,868	13,003
福井謙一記念研究センター	22	5	27	22	5	27	-	-	-
大学文書館	-	-	-	696	-	696	691	-	691
その他	-	-	-	167	100	267	-	1	1
合計	64,806	81,760	146,566	3,143,875	3,002,765	6,146,640	1,493,396	1,193,957	2,687,353

(注1) 附属図書館宇治分館は、化学研究所、エネルギー理工学研究所、防災研究所、生存圏研究所の蔵書数等を含めた数

図書館の動き

平成18年

<p>4月 7日 附属図書館新入生オリエンテーション、留学生オリエンテーション(～13日)</p> <p>18日 平成18年度図書系職員初任者研修(～19日)</p> <p>21日 平成18年度国立大学図書館協会近畿地区総会</p> <p>27日 図書系連絡会議</p> <p>28日 京都大学図書館協議会(平成18年度第1回)</p> <p>5月25日 図書系連絡会議 外国雑誌センター館会議(東京大)</p> <p>6月 2日 大学図書館近畿イニシアティブ運営委員会(平成18年度第1回) (神戸大)</p> <p>7日 京都大学図書館協議会幹事会(平成18年度第1回)</p> <p>12日 附属図書館運営委員会(平成18年度第1回)</p> <p>22日 図書系連絡会議</p> <p>26日 京都大学図書館協議会認証システム監理特別委員会(平成18年度第1回)</p> <p>28日 6th Fundamentals Seminar「会計基準と図</p>	<p>書受入・管理業務の実際」第1回</p> <p>29日 第53回国立大学図書館協会総会(一橋大)</p> <p>7月 5日 NII目録システム地域講習会(～7日)</p> <p>10日 京都大学図書館協議会幹事会(平成18年度第2回)</p> <p>京都大学図書館協議会第一特別委員会(情報資源) (平成18年度第1回)</p> <p>13日 6th Fundamentals Seminar「会計基準と図書受入・管理業務の実際」第2回</p> <p>21日 京都大学図書館協議会(平成18年度第2回)第60回国公私立大学図書館協力委員会</p> <p>26日 京都大学図書館協議会第二特別委員会(図書館サービス) (平成18年度第1回)</p> <p>27日 図書系連絡会議</p> <p>8月 1日 6th Fundamentals Seminar「会計基準と図書受入・管理業務の実際」第3回</p> <p>10日 京都大学オープンキャンパス2006・図書館開放(～11日)</p>
--	---

目 次

共に育てよう、京都大学学術情報リポジトリ	1
機関リポジトリ入門	3
思い出の一冊 松平千秋訳『ヘロドトス』	6
近代の記録 - 「京セラ文庫『英国議会資料』」の開設にむけて -	7
学内デリバリー・サービス(現物貸借)の運用開始について	9
学内図書館室移転・閉室情報	9
教員著作寄贈図書一覧	10
蔵書統計(平成18年4月1日現在)	11
図書館の動き	12

編集後記

「機関リポジトリ」ってなんですか? 「学術情報リポジトリ」とは違うのですか?
 周りに言葉が溢れていて、いまさら聞きにくいなーと感じていた素朴な疑問、すっかり解消したでしょうか。
 しかし京大を始めどの機関でも試行錯誤が続いています。
 誰が、何時、何処で、何故、どのようにリポジトリを構築するかの検討も重要ですが、まさに「共に育てよう」の姿勢が何よりの推進力となりそうです。(e)